



Title	朱有燉の倫理世界—朱子学との関わりを中心に—
Author(s)	温, 彬
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101579
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(温彬)	
論文題名	朱有燉の倫理世界 -朱子学との関わりを中心に-
論文内容の要旨	
<p>本博士論文は、明代前期の劇作家である朱有燉（一三七九年—一四三九年）の演劇思想、特にその演劇教化思想を研究対象とする。</p> <p>これまでの先行研究は、朱有燉の生涯や演劇形式の革新に関する分野で多くの成果を上げている。しかしながら、朱有燉の演劇観、特にその演劇教化観や作品の趣旨に関する研究は、未だ十分に進展しているとは言い難い。このために、朱有燉の作品思想および演劇観は、これまで十分な重視や正当な評価を受けることがなかった。</p> <p>明代前期の劇壇では、「国初十六子」と呼ばれる十六人の劇作家、および朱有燉とその叔父である朱権（一三七八年—一四四八年）が主に活躍していた。朱有燉を除き、これらの人々の作品の大部分はすでに散逸している。しかし、朱有燉が作った三十一部の作品は、幸運にもすべて現存している。そのため、彼は明代前期の演劇研究において避けられない重要な人物となっている。このために、彼の演劇形式における革新への貢献に注目するだけでなく、彼の作品、および彼の演劇思想の意義や価値を改めて検討することも、明代前期の演劇思想や創作活動を理解することに非常に必要である。</p> <p>さらに、明朝の建国以来、朱子学は官方により「正学」として位置づけられてきた。そして、朱有燉も幼少期より朱子学の教育を受けて育っている。このため、朱子学は彼の教化思想を理解する上で最も重要な視点であると言える。しかし実際のところ、先行研究は朱有燉の演劇教化と朱子学との関連性に注目しているものの、その認識は依然として「朱有燉が演劇という形式を利用して朱子学の道徳規範を宣揚しようとした」という点に留まっている。朱子学の人間観や修養論、さらには鬼神観といった問題がどのようにして朱有燉の思想や作品世界を構築したのかについては、ほぼ詳しく論じられていない。</p> <p>以上の状況を踏まえ、本論文では朱子学と朱有燉の演劇教化思想、さらにその作品における倫理的趣旨との関連性について、より深く探究することを試みる。先行研究が朱有燉作品の内容における朱子学の「貞節」「忠義」といった朱子学が推奨する倫理規範にのみ注目しているのに対し、筆者は考察の範囲をさらに広げ、朱子学の人間観、道徳実践観、工夫論、さらに鬼神観にまで及ぶ視点を採用する。これにより、朱子学が朱有燉の演劇教化思想の成立にどのような理論的基盤を提供したのか、そして朱有燉の作品が朱子学に関連するどのようなメッセージを伝えているのかを解明することを目指す。</p> <p>以上の問題意識に基づき、本論文の構成は以下の四つの章から成っている。</p> <p>まず第一章では、朱有燉の生涯および彼の演劇創作を紹介するだけでなく、朱有燉の朱子学受容の問題にも焦点を当てる。朱有燉の青年期における教育について、先行研究では彼の師である劉淳が言及されている。しかし、資料の乏しさから、劉淳の学風を直接的に考察することは難しい。とはいえ、元代から明初にかけて、北方の朱子学者たちは基本的に元代朱子学の大家である許衡（許魯齋、一二〇九年—一二八一年）を学術的指標としてきた。劉淳が北方出身の学者であることを踏まえると、彼が許衡の影響を受けた可能性は十分考慮に値する。そこで筆者は、劉淳が残した著作名を手がかりに、彼の学風と許衡との関係を検証する試みを行う。さらに、劉淳だけでなく、筆者は朱有燉の青年期において、周王府に南方の江西地方出身の儒者たちが集まっていた点にも注目した。これらの儒者たちは、王府において紀善や伴読など、王子の教育に関わる職務を務めることが多く、朱有燉の教育活動にも直接関与していた可能性が極めて高い。そのため、これらの儒者が朱有燉に与えた影響は、劉淳をはるかに上回るものであった可能性がある。元代から明初にかけて、江西地域には北方の許衡に匹敵する名声を持つ朱子学者である呉澄（呉草廬、一二四九年—一三三三年）が存在していた。彼の草廬学派は江西で極めて大きな影響力を持っていました。周王府に集まつた江西出身の儒者たちの多くは、江西の吉安地域またはその周辺の出自であり、この地域は草廬学派の拠点である撫州に近接している。この点を踏まえ、筆者はこれら江西学者の学風を考察し、草廬学派との関連性を確認する試みを</p>	

行う。本章の最後では、朱有燉の「格物窮理」や「静坐」に関する言身についても考察を行い、彼の朱子学における学風が江西の儒者たちとの関連性を有しているかどうかを検証する。

次に、第二章では、先行研究における朱有燉の戯曲觀に関する「彼は戯曲の教化機能を重視した」「彼の戯曲教化意識の形成は明朝廷の文化政策の影響を受けた」といった表層的な理解を超えることを試みる。筆者は、朱有燉自身による教化に関する言説を体系的に整理し、それに基づいて彼の演劇教化思想の全体像とその構造を描き出すことを目指す。そしてさらに、その背後にある人間觀、情感論、さらには道徳実践觀といった理論的基盤を追究し、彼の教化思想の核心的な趣旨を明らかにする。本章では、まず朱子学の人間觀、特にその中核的な概念である「天命之性」が朱有燉の人間觀および觀客認識の形成に与えた影響について考察する。これにより、朱有燉が觀衆を教化可能な存在と見なした理由、さらに演劇教化の最終的な目標が何かを理解することを目指す。この枠組みの中で、筆者はさらに彼の教化思想の具体的な展開を探究する。具体的には、まず演劇教化における情感、特に羞恥心の役割に対する朱有燉の見解を考察する。さらに、羞恥心がいかにして觀客の堅固な道徳意志の確立を助けるのかについて分析する。最後に、朱有燉の道徳実践觀を取り上げ、この見解の形成が明代前期の朱子学とどのように関連しているのかを検討する。朱有燉の演劇教化思想の構造と核心的な趣旨を把握した上で、筆者は先行研究における彼の思想の「明代朝廷の意志の体現」という位置づけを再考する。

第三章では、朱有燉が書いた、先行研究において「貞節觀の宣揚」と理解されてきた貞節劇を中心に取り上げ、それらの作品における倫理的主旨を再検討する。従来の同種の作品とは異なり、朱有燉はこれらの作品の中で、女性主人公が金錢に対して示す態度の違いを丹念に描写している点が特徴的である。本章では、朱有燉の作品『宣平巷劉金兒復落娼』『新編李妙清花裏悟真如』『新編劉盼春香囊怨』における三種類の妓女像を重点的に分析する。これを通じて、物欲に対する態度が彼女たちを貞婦へと導くのか、あるいは淫婦へと堕落させるのかを理解することを目指す。さらに、『新編黒旋風仗義疎財』『新編閨雲長義勇辭金』の二作品に登場する李達と閨羽という二人の英雄像についても論じる。その際、彼らの金錢に対する態度と、忠義という美德との関連性に特に注目する。このような分析を基に、筆者は朱有燉の作品には一貫した深層的な主旨、すなわち、「人々に欲望への警戒を促す」というメッセージが存在することを指摘する。また、さらに一步進めて、この主旨と朱子学における修身法の一つである「主敬」との関係について考察し、朱有燉作品の倫理的意味を再評価することを試みる。

第四章では、『新編張天師明断辰鉤月』や『仙官慶会』といった作品を中心に、朱有燉の作品における鬼神像およびその教化的役割についてさらに考察する。朱有燉のこれらの作品において、鬼神たちは自らを「氣」としての属性で強調する場面が多く見られる。この点を踏まえ、筆者は朱有燉の描く鬼神像と、朱子学における「氣」による鬼神の解釈に基づく鬼神觀との関連性を把握し、彼がどのようにして自作の鬼神を自然化し、合理主義化しているのかを明らかにすることを目指す。さらに、筆者は朱有燉が鬼神を合理主義化することによって、民間の勸善書に見られる宗教的な道徳思想をどのようにして世俗化へと転換させたのかについても指摘する。上記の考察では、朱有燉が作品中で朱子学の思想を用いて民間信仰の鬼神をどのように改造し、それによって鬼神を道徳教化により適した形で役立てたのかを明らかにするほか、朱子学が演劇を通じて民間信仰に介入した一側面を垣間見ることも指摘したい。

終章は本論文のまとめ部分であり、筆者は第一章から第四章までの考察を総合的にまとめ、本論文の結論を導き出す。これまでの先行研究では、朱有燉を含む明代前期の劇作家の演劇觀や作品思想を、単に朝廷の政治的意志の反映とみなす傾向があった。本研究を通じて、筆者は以下の点を指摘したい。第一に、朱有燉の演劇教化思想は、単純に明代朝廷の政治的意志を反映したものと解釈すべきではなく、彼の核心的な関心は政治秩序の構築や維持ではなく、「復性」（生まれ持つ道徳的本性の回復）という儒教の究極的な追求にあったという点である。第二に、朱有燉の作品の核心的な教化の主旨は、「忠孝」や「貞節」の宣揚にあるのではなく、朱子学の「敬」という観念、すなわち人が常に慎重な心構えを持ち、欲望に対処することで本性を失わないようにすることにあったという点である。

さらに、朱有燉の演劇觀と作品思想の再検討を通じて、明代前期の演劇觀や作品思想を改めて見直す必要性を強調するとともに、当時の演劇が朱子学を大衆層に普及させる過程で果たした重要な意義も提示したいと考える。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名 (温彬)		
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 大阪大学 教授	中尾 薫
	副査 大阪大学 教授	門脇 むつみ
	副査 大阪大学 准教授	林 晓光
	副査 大阪大学 講師	伊藤 寧美

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 朱有燉の倫理世界 —朱子学との関わりを中心に—

学位申請者 溫 彬

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	中尾薫
副査	大阪大学教授	門脇むつみ
副査	大阪大学准教授	林暁光
副査	大阪大学講師	伊藤寧美

【論文内容の要旨】

本論文は、中国明代の戯曲家朱有燉（1379–1439）の作品における教化演劇としての倫理的趣旨を再解釈し新しい評価を提示するものである。序章、本論四章、終章の構成で、400字詰め原稿用紙に換算して約560枚。序章では、1930年代までの研究では明代雑劇作家として高い芸術性により評価を得ていたが、1950年代以降封建階級の文学として低評価となり、1980年代にはいって戯曲内容については再評価されつつあるが、思想面においては明代国家イデオロギーの反映に過ぎないと評価が分かれていると先行研究の状況を振り返る。第1章では、朱有燉が初代明皇帝の孫として生まれた生涯と現存三十一作品を概観し、元雑劇の厳格な戯曲規定を打ち破った革新性や音調の協和によって評価され、当時は一般大衆からも支持されていたと述べる。また、朱有燉の学問的背景として、周王府における江西儒者グループの影響が想定され、朱子学と象山学の融合と「静」への修養が重視されていること、それは明王朝や洪武帝の儒学的思想とは異なることを明らかにした。第2章では朱有燉の詩文や劇作序文などの言説より彼の演劇教化思想の根元や観客意識を読み解いた。さらには観客論と劇作における主人公の選択の視点から、朱子学における「天命の性」を根底とする人間観がみられ、観客は登場人物の状況や言動に感嘆し羞恥心という情感を派生させることによって観客自身が持つ道徳観「性命の道」を自覚できる教化の理路が見出せると分析した。また「天命の性」を阻害するものとして物欲を戒める考えがあり、朱有燉がとりわけその点を強調していることを指摘した。第3章・第4章では具体的に作品分析から、朱有燉の教化劇としての策略を読み解く。第3章では、朱有燉の全作品の3分の1を占める妓女を描いた作品を「貞節劇」と称し、開封府における妓女業の実態と社会問題が反映されていることを指摘したうえで、淫婦、貞女の描かれ方について『宣平巷劉金児復落娼』『新編李妙清花里悟真如』『新編劉盼春守志香囊怨』などを中心に詳細に分析した。ここでは、彼女たちの「貞節」を阻害する動機として物欲があり、あるいは「貞節」を全うする背景として物欲への遮断が必ず描かれていることを指摘し、いずれの女性も先天的に本性のなかに「貞節」という美德があるという構造が見いだせることを明らかにした。また、『新編黒旋風仗義疎財』『新編閻雲長義勇辞金』といった「英雄劇」においても、同様に英雄の条件として物欲への無欲が描かれていることを指摘する。さらには、これまでの分析により浮かび上がった特徴は、封建制度上の貞節や忠義といった生き方を称揚するためというよりも、観劇によって観客がすでに持つてい

る「天命の性」に気付くことを目指して描いたもので、朱有燉が好んだ「主敬」や「主静」の修行の効果に類似するとした。また、明朝の民衆教化の考えとは異なり、あくまでも朱子学思想の啓蒙としての役割に近いとも述べた。第4章では、朱有燉の描く鬼神は朱子学における氣による鬼神という解釈を継承しつつも、陰陽二氣の消長運動として捉えており、民間信仰といった宗教的な崇拜畏敬の対象ではなく、人間自らの修養状態に基づく存在として描かれており、観客が迷信に陥ることを防ぐ試みであると指摘した。終章では、以上の議論を踏まえ、朱有燉の作品に対する演劇教化としての役割は、特定の政治的目的を達成することではなく、「天命之性」という朱子学の究極的な追求にあると結論付けた。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、イデオロギー影響下での様々な学説の見直しが進んでいる近年の流れに即し、政治的な教化劇の作者として低く評価された親王出身の朱有燉を題材に選び再評価を試みた問題意識と、具体的に朱有燉の言説や作品を体系的にとらえ詳細に分析することで新しい評価を見出し得たことがまず高く評価された。日本において朱有燉は拓本『蘭亭修禊図』を残したことでの名が知られるとはい、演劇作品は江戸時代後期になってようやく伝来し広く認知されたとは言い難く、朱有燉の演劇作品についての研究も、1960年以降停滞している。また、朱有燉をはじめとする明雜劇自体に関心が向けられることが少なく、それ以前の元雜劇に対する高い関心と評価に比して、その特徴については表面的な理解と言及に留まっているのが現状である。本論文は、その後の中国での紆余曲折を経た研究状況を踏まえ、朱有燉のみならず明代雜劇の実情や朱子学の影響について従来の指摘よりもより深く、朱子学史上の思想的変遷を踏まえた実態とその影響を詳らかにし、新たな研究の視座を示したことも高く評価される点である。また国内外に限らず演劇研究において演劇と教育は現在でも関心の高い研究テーマであり、朱有燉の観客論や教化演劇論は現代にそのまま応用できるものとはいえないが、現代の論点や問題意識を逆照射する意味でも興味深い事例を提供している。

しかし、問題点も指摘された。まず、論文中で詳述されているように朱有燉の思想的背景にある朱子学は象山学の色彩が濃いと判断されるほか、先秦時代からの徳性観念の継承と考えるべき特徴が見出されるが、「朱子学」という言葉で一貫させて論述を進めたことで、朱子学史上の思想的変遷の過渡にある実情について、やや明快さに欠ける印象となっている。また、引用される資料の原文の解釈や翻訳については、些細な点で誤解や論旨に引きつけた解釈と意訳に偏る傾向があり、原文の中立的な解釈によっても論旨に影響するものではないため、さらなる厳密な本文批判と緻密さを追求することが可能である。また、第3章において明代前期における妓女業の実態を明らかにした点は興味深い試みで評価されるが、さらに深い議論と実態の調査を進める余地があり、また作品における題材としてではなく観客意識の背景として論じる方が戯曲という特質や論旨に相応しい。さらに朱有燉の戯曲以外の絵画や詩文、政治的な立場、明代演劇の実情や観客層などの周縁についての言及が少なく、それらの記述を厚くすることが望まれる。また、朱有燉が想定する観客層の具体像について明確に示されていないが、それを示すことで、結論がより説得力のある評価となり得る。また、朱有燉の戯曲規定の革新については先行研究による指摘に留まっているが、朱子学思想の啓蒙としての策略と関連付けてさらに論じることが可能だったのではないか。また4章についてもな断片的な指摘に止まっており、論文の趣旨に沿って考察を補強すべきである。

以上のように改善点や問題点はあるものの、これらの指摘について、申請者は朱子学思想史や明代雜劇についての深い知識を示しつつ、資料上の限界や、今後の課題や研究の展望として明解な回答をした。また、これらの問題点は朱有燉や明代雜劇について新しい評価軸を提示することの達成という評価に影響を及ぼすものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。